

一般的、事実的な条件表現の「と、たら、ば」の習得について

韓^{ハン} 先熙^{ソンヒ} (祥明大^{ソンミョング} 教授)

1 はじめに

日本語を学習している外国人にとって習得が難しいものの一つに条件表現「と、ば、たら、なら」がある。条件とは前件が未実現で前件と後件の意味関係が順接の場合で、普通、仮定条件と一般的、事実的な条件にわけることができる。仮定条件とはある出来事が起こった場合を仮定して、自分の考えや相手への働きかけを表現するものである。また一般的な条件とは、二つのことがらが自然の法則や社会の慣習など、広く知られているような知識に基づいて表現されるもので、事実的な条件とは、現在あるいは過去に実際に起こった二つのことがらの関係を表すものである。この条件表現はその意味と用法がかなり複雑で、理解するには難しいところが多いし、理解してもその使いわけが出来ない場合が多い。そこで本稿では韓国人学習者を対象に条件表現の習得状況を知るためにアンケート調査を行った。今回は条件表現のなかでも、一般的、事実的な条件表現を中心に「と、たら、ば」の用法についてその調査を行う。

2 調査の概要

調査は韓国のS大学の日本語文学に在学している学生106名を対象にした。条件表現を学習していない一年は対象からはずし、2年生から4年生を対象にしたが、最近では学校以外にも日本語学習の場が多くて学年と日本語のレベルの相関関係がないので日本語能力試験(JLPT)を基準にグループを分けた。日本語能力試験1級取得者13名(3群)と、2級取得者38名(2群)、その他の学生55名(1群)を、その対象にする。

アンケートは『日本語文法 セルフマスターシリーズ 7 条件表現』(2001, 蓮沼昭子他編、寺村秀夫 企画)に従い、仮定条件と一般的、事実的な条件とに分け、その中で今回は一般的、事実的な条件の表現を10問取り上げ、アンケート調査を行った。調査の設問はそれぞれ一般的、習慣的關係、現実の状況、発見の状況、きっかけ、動作の連続の項目に分け2問ずつ出し、正しいものを選ぶようにしたが、アンケートの設問紙は項目がわからないように項目順にはしなかった。また語彙がむずかし

くて、条件表現の調査の妨げにならないようむずかしそうな語彙の意味をしるしておく。

3 考察

グループ	1群 (55名)	2群 (38名)	3群 (13名)	全体 (106名)
レベル	1・2級を取得していない者	2級取得者	1級取得者	61.6%
平均の正答率 (%)	54.7	67.1	74.6	

(表1) 全体の結果

まず、全体の結果を見ると、1群が54.7%、2群が67.1%、3群が74.6%で、レベルがあがるにつれ、正答率が上がっていることがわかる。項目別の平均正答率は次のようである。

項目	一般的、 習慣的關係	現実の状況	発見の状況	きっかけ	動作の連続
平均の正答率 (%)	56.6	65.1	72.2	58.0	55.7

(表2) 項目別の平均正答率

発見の状況を表す1番と7番の例文の正答率が最も高く(72.2%)、動作の連続を表す3番と4番の正答率が最も低い(55.7%)。次に項目別の例文を見ながらレベル別の正答率を考えてみる。

3-1 一般的、習慣的關係

8. 体温が (あがると、あがったら) 汗が出る。

5. 兄は少しお金が (貯まったら、貯まると) 海外旅行に出かけます。

8	一般的、 習慣的關係	72.7	84.2	92.3	79.2
5		27.3	42.1	38.5	34.0

「ば」と「と」は自然の法則・社会の法則など、一般的に成り立つ因果関係によって結ばれることを表すのに使われるが、「たら」は使われにくい例文である。8の例文は一般的関係を表し、5の例文は習慣的關係を表しているが、8の例文の正答率は高いが(79.2%)、5の例文が非常に低い。10の例文のうち、最も低い正答率である。これは半分以上の学生が「たら」を選んだ結果である。そのため項目別の正答率も低い(56.6%)。レベル別に見ると8の例文はレベルがあがるにつれ、正答率も徐々にあがるが(72.7%→84.2%→92.3%)、5の例文はレベルがあがっても正答率はあがらず、むしろ3群の正答率より2群の正答率が高く現れている。これは上級レベルの学習者が「と」の習慣的關係の用法を習得していない結果であるだろうが、習得していたとしても「と」「たら」に当たる韓国語が、両方とも「~면」([myun])であるので、その母国語の影響で間違ったという可能性も考えられる。それについてはもうすこし検討すべきである。

3-2 現実に即した状況

10. この角を(曲がれば、曲がると)右手に郵便局があります。

6. あまり病人のそばへ(寄ると、寄れば)風邪がうつるよ。

10	現実の状況	61.8	78.9	84.6	70.8
6		47.3	68.4	84.6	59.4

10と6の例文は現実に即した状況を表し、まだ成立していない前件と後件を結び付けて、仮定的な条件関係を表すことができる「と」の用法である。「ば」は単なる状況の設定には使われないし、後件によくない結果を表す場合には使われない。「と」は後件に悪い結果を表すことができるが、その場合、6の例のように相手への警告的な表現になる。項目別の正答率は65.1%であるが、例文的に見ると6の例文の平均正答率が低い。10の例文は文法教材でよく目にする表現であるせいか、学生たちになれているようだが、悪い結果を表す「と」の用法はあまり習得していないようである。特にレベルの低い1群で半分ぐらいの学生が間違っていることがわかる。

3-3 発見の状況

1. ドアを（あけたら、あければ）父が倒れていた。
 7. 本を（読んでいると、読んでいれば）突然電話が鳴った。

1	発見の状況	72.7	94.7	100	84.0
7		50.9	73.7	69.2	61.3

ある行動の結果わかったこと、つまり発見したことを表す。後件は予想しなかった偶発の事態が示され、過去形である。「と」と「たら」で互いに言い換えが可能であるが、「ば」は使わない。後件に話し手の意志とは無関係な状況が続くことできっかけや動詞の連続を表す用法とは区別される。7の例は前件が動作の持続を表し、後件が過去の一回の出来事を表し、「～の最中に、～が起こった」という意味を表す。五つの項目の中で最も高い正答率を見せている（72.2%）。特に1の例文は3群の1級取得者は全員「たら」を選んで100%の正答率を見せている。反面7の例は1群は50.9%、2群は73.7%、3群は69.2%の正答率である。「ば」の用法がまだ充分習得していないせいであるが、3群の正答率が2群より低いということは興味深いことである。

3-4 きっかけ

9. 兄が（殴れば、殴ると）弟は泣き出した。
 2. 薬を（飲んだら、飲むと）頭痛が 治りました。

9	きっかけ	65.5	78.9	92.3	73.6
2		43.6	34.2	61.5	42.5

「と、たら」が過去の出来事をつなぐ場合、前件が後件のきっかけ・原因となる表現である。9の例は前件と後件の主語が異なる場合で、後件には話し手以外の動作や出来事がくる。

2の例文のように後件が、話し手が実際に直接体験した事実で話し手しかわからない出来事であるという意味が強い場合には「たら」のみが使える。すなわち自分の体験を直接伝える会話の場合は「たら」が使われるわけだが、学生たちは「と」のほうを選んでいる（全体の平均率42.5%）。学生たちには原因を表す「ば」と「と」の区別は習得が容易のようだが、「と」と「たら」の使い分けは難解のようで、2番

の例文のように、その混同が見られる。

3-5 動作の連続

3. 男は鍵を（取り出せば、取り出すと）ドアを開けた。

4. コートを（脱ぐと、脱いだら）ハンガーに掛けた。

3	動作の連続	58.2	71.1	84.6	66.0
4		47.3	44.7	38.4	45.3

3と4の例文は前後件のことがらが順当に起こることを示すはたらきのある「と」の用法の例文である。同一主語の連続した動作をつなぐことが出来るが、このような事実的条件では「たら」や「ば」を用いることが出来ない。3の例文の正答率は高く現われ、またレベルが上るにつれ、正答率も徐々にあがるが(58.2%→71.1%→84.6%)、「と」と「たら」の使い分けの例文である4の例文は全体的に正答率が低く、レベルが上れば上るほど正答率は落ちている。

この項目では「ば」と「と」の使い分けよりは「と」と「たら」の使い分けの正答率が低いが、これは「きっかけ」を表す用法と同じような傾向を見せている。つまり「きっかけ」の意味を表す「ば」と「と」の使い分けより「と」と「たら」が習得がむずかしかったのと同じように、動作の連続の用法を表すときも「ば」と「と」の使い分けよりは、「と」と「たら」の使い分けの習得がむずかしかったようである。

4 おわりに

以上、「と」「たら」の一般的、事実的な条件を中心にその用法の習得状況を調べてみたが、その結果をまとめると次のようである。

- 1) レベルがあがるにつれ、条件表現の習得も進む。
- 2) 発見の状況を表す「たら」の用法の正答率が最も高く、学習者がその用法をよく習得していると考えてよさそうである。
- 3) 項目的には発見の状況を表す用法の正答率が最も高く、動作の連続を表す用法の正答率が最も低く現われる。
- 4) 比較的に正答率が高く、よく習得していると思われる例文はレベルが上がればその正答率も高くなるが、正答率の低い例文はレベルがあがっても正答率がのびない。

- 5) 「と」、「たら」の使い分けの例文である習慣的關係の用法の5番の例文と、きっかけや原因の用法を表す2の例文、動詞の連続を表す用法の4の例文がともに正答率が低くて、学習者には習得しにくい条件表現のようである。反面、発見の状況を表す「たら、ば」、きっかけを表す用法や動作の連続を表す用法の「と、ば」の使いわけは習得しやすいようである。

<参考文献>

増岡隆志編（1993）『日本語の条件表現』くろしお出版

蓮沼昭子他（2001）『日本語文法 セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版社



李王朝の宮殿、慶福宮をのぞむ